

2007年度研究紀要抜粋 「外部からの研究者とともに、単元開発をする」

8月30日(木) 大阪大学 臨床哲学 准教授 本間先生 「子どもの哲学」 講演会を実施する。

子どもと一緒に する哲学	子どもの哲学 Philosophy for Children から Philosophy with Children 子どものための哲学ではなくて、子どもと一緒にする哲学という意味である。 未熟な哲学と捉えるのではなく、子どもから哲学をしようという考えを大切にしている。 哲学と哲学研究は違う。研究は大学で行われるものである。しかし、哲学探究である「子どもの哲学」は、子どもの学びの場、年齢にかかわらず、「哲学とは？」ではなく、「考えることを楽しむ」ものとして捉えたい。
考えることを 楽しむ	「子どもの哲学」はアメリカで創始され、南米・アフリカ・ヨーロッパ・韓国に広がる。 対話型授業。教科横断型教育。「子どもの哲学」の子どもは特定の年齢層と言うものではなく、生涯にわたって学び続けるのがよい。議論は習慣、急にできるものではなく、小学校から行われるべきものであり、高校で始めるのは遅い。子どもは問いかけを楽しむ存在と捉える。 フランス ロの字、コの字型で議論。4・5年2年間 話す、書くの繰り返し子どもを育てる アメリカ 中学校での実践。教師も子どもと同じ議論の参加者。大学院生が司会・進行をする。「ものの本質とは何か」について話し合う。司会をする大学院生がいろいろな問いかけをして揺さぶりをかけて子どもの考えを作っていく。 小学校での実践では、絵本・物語を使う。楽しめるテキストか。議論できるものであれば、面白いところを見つけ、議論を進めていく。大切なのは、振り返り「今日は何を楽しんだか。」である。
自分に向き合 うために他人 が必要である	対話による学び 対話はおしゃべりではなく、自分の疑問に気づき、問答できる。この時に他人の存在が重要である。自分に向き合うために他人は必要であるというのが、対話の基本である。疑問を他人に伝える。問いを作るのが、難しい。また、一個一個の問いに対して答えていく。その積み上げることが哲学であり、はしょってしまうと哲学ではない。肯定否定もせずにいっしょに吟味しながら、意見を聞く。「その意見がそういう意見なんだ。じゃあ何故そう思うのですか？」と考えていく。
足場を持って 議論していく	対話による気づき。自分を「ことば」にすることが大切。対話の中から自分を気づく。自分が見えてくると他人も見えてくる。 子どもの哲学がめざすもの。Critical Thinking クリティカルシンキング 批判的に考える。批判は否定や非難ではなく。分かれ道。区別していく。AかBかの前に立ち止まった考えるという意味。本人が納得できているか。足場を持って議論していく。(統計と自分とどういう関係があるかなど) わからないことを認めること。Critical Thinking は方法ではなく態度。

対話による学び、気づきについて貴重な示唆を頂く。本間先生が話し合いの進行役をして頂き、数人の先生と絵本の「ともだちや」について話し合う時間を設けた。実際の本間先生の動きから、意見を引き出すための尋ね方等を学ぶ事ができた。普段の授業における教師の子どもに対する対応の仕方を見つめ直すよい機会となった。「子どもの哲学」がめざす、論理的・批判的に考える、創造的思考力、状況のなかで考え経験に意味を見いだす力等は、これからの子どもが生きていく上で大切な力であると考え。

8月の本間先生の講演会をもとにして「子どもの哲学」を取り入れた全校研を行う。10月25日に6年総合的な学習であなたとわたしで考えよう「かえるとさそり」の研究授業を行う。

第6学年 総合的な学習指導案

金澤 正治

1. 単元名 あなたとわたしで考えよう 「かえるとさそり」

2. ねらい

- ・自分の考えを自分の言葉で、ゆっくりていねいに話す。
- ・対話を通して新しい考えを持つことができる。

3. 指導にあたって

なぜ、今回「かえるとさそり」の哲学的寓話を使って授業をしようと考えたのか。それは、クラスのA君のことが私の頭の中にあったからです。A君は、とても話好きで、思ったことをすぐに言葉にだしてしまいます。しかし、友だちのちょっとしたことにすぐに腹が立ち、相手に心無い言葉を投げかけてしまいます。言い返せない子にはしつこく心無い言葉を大きな声で言い続け、感情のコントロールが難しいことが度々ありました。そんな彼の態度に、周りの子たちはひいてしまい、彼に対する思いは、良いものではなくなくなってきています。A君だけでなく、自分の衝動をうまくコントロールできなくて、他の6年生の子たちからは理解しにくい行動する子が数人います。

また、彼ら以外の子たちも自分が思っていることとは違う衝動的な言動をし、友だちとうまくいかない、家族ともめてしまうという体験をそれぞれの子がしていると思います。

哲学寓話集 LES PHILO FABLES かえるとさそり

川のほとりで、一匹のさそりが向こう岸に渡りたいと思いました。そこでさそりは一匹のかえるに話しかけました。

—あの、お願いがあるんだけど。ぼくをきみの背中にのせてくれないかな、それで向こう側に渡してほしいんだけど。

—きみは、頭がおかしいんじゃないかい？、かえるは答えてこう言いました。もし、ぼくがきみを背中にのせてごらんよ、きみはぼくのことを刺すだろう。そうしたらぼくは死んでしまうじゃないか。

—そんなにばかじゃないよ。さそりは答えました。どうしてぼくがきみを刺さなきゃいけないの？ぼくがきみを刺しちゃったら、きみはおぼれるだろう、そしたら、ぼくだって泳げないんだから死んでしまうじゃないか。

長い交渉のあげく、かえるはとうとう納得し、さそりを背中にのせて、川を渡りはじめました。

ところが、川のなかほどまで来たとき、かえるは焼けるよう痛みを感じ、毒で手足がうごかなくなっていくのを感じました。

—ちょっと！かえるは叫びました。きみはぼくを刺したんだね、ぼくは死んでしまう！

—そうなんだ、さそりは答えました。ほんとうにごめんよ。やっぱり生まれつきの性質（たち）からはのがれることができないんだね。

そしてさそりも泥水のなかに消えていきました。

（アフリカのおはなし）

問い

みなさんは、ときどき、自分の意に反して、衝動にしたがってふるまうことはありませんか？

私たちは、さまざまな経験を重ねながら、自分の命さえも危険にさらすような衝動的な行いを制することを学びます。こうして衝き動かされてすることは、自分の行いなののでしょうか。何かをせずにはおれない自分と、それをしないでおこうとする自分のどちらが、自分なののでしょうか。

この物語について対話することにより、自分の意に反して衝動にしたがってふるまってしまう自分に対する気づきを子どもたちに持たせたいと願っています。自分についての気づきを丁寧に出し合い、また、今回は積極的に教師が子どもたちに問いかけを行い、人間についての考えを深めることができればよいなと思っています。

子どもたちに、アリストテレスの話をする必要はありませんが、アリストテレスによれば、善い人とは、完全無欠の善人ではなく、衝動をもちながらも、それを欲望と自然のままに放置するのではなく、しかるべきときに、然るべき仕方発揮させる習慣（エトス）こそが「徳」である、と考えました。

「衝動を抑えるべきだ」という禁止、あるいは「こうやって抑えるのだ」という心を操る技術ではなく、人というものが、どういう存在であり、ともに生きていくうえで、自分や他人をどう理解するのか、を一緒に考えるのが、哲学であり、倫理学だと思います。

(本間先生のメールから)

この話し合いを通して、人間、誰にも抑えられない衝動というものがあるということクラスの子どもたちが共有することができれば、身近な存在である A 君達を同じ仲間として受け入れ認めることができるようになるのでは・・・と願っています。

4. 本時の展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1. 「かえるとさそり」の物語をよみ、気づいたことを書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・物語をプリントして配る。一人で物語に向き合う時間をとることにより、考える時間を少しとる。
2. 物語について、話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・最初は、あまり問いかけをすることなく、丁寧に話を聞く姿勢を意識的につくり、話しやすい雰囲気をつくる。 ・丁寧に聴きながら、問いかけを行う。問いかけに対する答えがすぐに子どもからでなくてもゆっくり待ってあげる。 ・みんなで話し合うべき課題が出てきたら、少し自由に数人の子たちと話し合う時間をとってから、全体で話をする。
3. 今日のふりかえりを書く	<ul style="list-style-type: none"> ・この話し合いを通して新たに見つけたことを一人で振り返ることにより、言葉にして書き記す。

今日も、哲学カフェで思いましたが、人はなかなか素直に自分の考えていることを言いません。なんどもていねいに聞いて、まわりの人にも質問させる、というのが、重要です。

■ 問い

○みなさんは、自分をおさえきれずについやってしまう、ということはありませんか？さそりのように、自分をおさえきれず、自分の命を失ってしまいました。

○このお話から、みなさんは何を考えますか？

○どうして自分をおさえないといけないのでしょうか？わたしたちは、いつのまに、自分をおさえる、ということを実感したのでしょうか？

○さそりはおさえるをまきぞえにしてしまいました。自分がうっかりやったことで、他人をまきぞえにする、ということはどう考えますか？

○おさえつける自分と、おさえつけられる自分と、どちらがほんとうの自分でしょうか？

○「よい人」は、自分をおさえつけることのできる人でしょうか？

それとも、「よい人」は、自分をおさえつける必要もないのでしょうか？

■ 議論のポイント

私たちは、自分で思っている以上に、人の意見に左右されて生きています。

「自分をおさえつけなければならない」「ひとにめいわくをかけてはいけない」と、日頃まわりから聞かされていることに対して、しっかり自分で考えること。自分は、どう思っているのかを、きちんとことばにしてみる。

自分がどう思っているのかを、言葉にするのは時間がかかります。

大人になればなるほど、これは難しくなります。

他人の意見を注意深く聞くことは、自分が何を考えているかを明らかにするのに、役立ちます。

こどもたちの関心を、まず自分の意見に耳をすませ、その次に、その意見と他人に意見を比べてみます。

「ことばの世界」で考える。

いちどことばにした「自分の考え」は、自分だけのものではなく、みんなのものであります。

「自分の考え」に対して、自分で別の意見をつくってわけてもよいし、人の意見を聞いて、自分の最初の意見を変えてもいいのです。

ことばの世界は、みんなのものです。

「自分を制する」というのは、ある種の美德だと考えられています。しかし、よく考えるこどもや人は、「自分を制するのは自分だろうか？」と問いかけます。常識は、「そんなことを考えてもしかたがない、無難にやり過ごそう」と言います。

そうすると、困難に直面したときに、自分というものに正面から向かい合うことができずに、自暴自棄になったり、爆発したりします。「考えるな、だまって従え」という声に対して、本当に自分の味方をしてくれるのが哲学です。

哲学とは、自分とつきあう、向かい合う術です。

(本間先生のメールから)

授業での子どもたちの発言

■感想

- さそりは自分の習性を認識していたのか？
- さそりはかえるをだましたのか？
- さそりは習性から逃れられるといいなあと思った。
- かえるは断るべきだった。
- さそりは命をかけたのだからがんばらなければならない。
- さそりは自分の意志で刺さないと考えた。
- さそりは約束を破った。
- さそりはかえるを刺す気はなかった。
- かえるはさそりに利用された。
- さそりは自分の意志の力でやめることができた。
- さそりは我慢していた。
- 体が勝手に動いた。
- さそりは生死をかけてでも、向こう岸にわたらなければならなかった。

■何について話し合いたいか

- 意志の力で悪い癖を抑えることができるか →これに決定
- 約束破り
- さそりはだましたのか
- かえるは断るべきだった
- かえるのしんじた気持ちはどこにいったか？

10月25日の授業を振り返り

金澤 正治

今回の授業協議会において、先生方に頂いた質問について、私にとってとても考えさせられるものであり、必死に答えました。お答えを話すことにより自分の考えがうまく言葉にできたことがあり、とても私にとってよい学ぶ機会になったことを感謝します。

私は今ふりかえると今回の授業で、自分の意に反して、衝動にしたがってふるまってしまう自分、どうしてそうになってしまうのかについて子どもたちと話し合いたいと思っていました。自分の意に反して衝動的に行動して、友だちや家族などの周りの人と気まづくなってしまうことに気がついている子が多いので、自分の経験を通して発言しやすいのではないかと、また、衝動的に行動してしまうことによるトラブルがクラスの中に多くあることと重ねて意見を言えるのではないかと考えていました。そんな話し合いの中で、子どもたちがお互いのことを理解しあえるように願っていました。

それは、私がこの教材を使って行う授業のねらいが、道徳的であるというか、話し合いを通してお互いに理解し、共感し合おうというレベルだったのだということです。これまでの授業においてもこの共感しあうというのが私の授業のスタンスであったと思います。しかしそれは、「かえるとさそり」の教材を学ぶことによってどんなことについて考えることができるかという理解が足らなかった、いわゆる教材研究が私に不足していたことになったと思います。それでは、子どもたちの話し合いにおいて、考えを深めるという支援を私がかえりきれなくて当たり前だと思っています。現に、子どもたちのとてもよい考えをもっと深める問いかけをできない対話の場面がありました。

そんな私に対して、子どもたちはとてもよい考えを発言してくれました。特に、素朴な疑問が多く出て、そ

の疑問が話す価値ある課題となるものばかりであったと思います。授業を行っている時に、その価値に気づくことができなかつたのは、やはり教材に対する私の理解の浅さによるものだと思います。

「かえるとさそり」の哲学的寓話は、読む人それぞれに様々な考えをもたらすのだということが先生方のご意見からよくわかりました。

「命に関わることが淡々と語られているので、すごく怖かった。」

「生まれつきの性質（たち）で殺されてしまっただけでしかたがないですむのか。最近そんな事件が多いの
でどうかと思う。自分の家族が殺されて、生まれつきの性質（たち）なのだからしかたがないで
いいのか？」

この意見については、とても私はドキッとしました。確かにその通りだと思いました。この教材が小学生にとってふさわしい教材なのかということについて考えてみる必要があると思いました。また、命にかかわる問題についての意見が子どもの中からでてきて、死や命について話し合うこともあっていいのではないかという意見もあると思います。みなさんはどうでしょうか？

今回の「かえるとさそり」の話は、私の教材文に対する読みの浅さから配慮が足らなかつた面もあるとは思いますが、逆に言えば、この物語が読む人の心を揺さぶる内容であると考えられます。授業を行ってみて、そのことがよくわかりました。

この物語を読んで考えが触発されたこどもたちから出される意見はとても聴きごたえがあるものでした。また、いくつかの疑問がすぐにでてきました。その疑問の中から、みんなで話し合う課題もスムーズに決めることができました。課題について、それぞれのこどもが意見を持つことができましたようです。

しかし、授業の中で、自分の意見を積極的に話すことができた子はすくなかつたと思います。もっといろいろな子が話すようにするためにはどうしたらいいのか？

進行役である私の聴き方に問題があると思います。ある子の意見は、「なるほど。」と言って聴くが、ある子の意見にはしっかり受け止めて聴けていないことがあります。授業協議会で指摘を受け、気づくことができました。聴けていない時は、次の授業の進め方について考えているか、前に出されたこども意見に心を奪われているかのどちらかである場合だと考えられます。授業の中で、こどもの意見を聴くことは本当に難しいです。

しかし、私はこどものいろいろな意見を聴くことができる授業をしたいと思っています。一問一答の発問を繰り返し、授業を進め、ある知識を効率的に教える授業を行うのでは、あまり聴くことの難しさを感じることはありません。自分が望む答えを聞き取り、その意見に肯定的な評価を与えればよいからです。確かにそれは授業を進めていく上で当たり前のことだと思います。しかし、そんな授業ばかりを行っていていいのだろうか、こどもに力をつけているのかと私は思うようになったのです。そして、もっとこどもが考え、話し合い、深まり合う授業をしてみたいと思っています。そんな時にある研究会で参観した授業に影響を受け、学習課題を細かくたて、授業をてきぱきと進めていく授業の進め方だけでなく、大まかな学習課題で、こどもの意見をじっくり聴きながら進める授業を多く行うようになったのです。じっくりゆっくり待ちながらこどもの意見を聴き、あまり話さない授業をやり始めた頃は、本当に大変で疲れたことを覚えています。しかし、この私の授業に対する構え方の変化により、こどもの中から自分が予想をしないような意見が日々の授業で聴けるようになりました。

しかし、こどもにいろいろな意見を出させ、深まりあう話し合いができる授業はなかなかできないでいました。そんな時に、こどもの哲学という授業があることを知ったのです。本間先生に教えて頂き、対話を通して考えを深め、発言をする授業のあり方にとってもひかれたのです。こどもの哲学という授業が持つ大きな可能性を私は信じています。私は授業をすることによって、その可能性をみなさんに伝えたかたのですが、うまくいかないことにもどかしさを感じています。

こどもの哲学が持つ可能性とは？本間先生がこの夏の研修でこう話されていました。

こどもの哲学は、子どもたちに哲学の知識を教えるのではなく、子どもたちとともに対話をしながら、自分で考えることを楽しむことをねらっています。

対話をして自分で考えることを楽しむことができること。私は価値あることだと思います。

この寓話によって、子ども達は多くの感想を話した。また、話したい課題を自分達で決めて話し合うことができた。しかし、意見がつながらず、話し合いにならないで時間がきてしまった。

授業協議会では、多くの疑問が投げかけられた。この寓話が子どもに教材としてふさわしいのか。この授業で何をねらっているのか。その疑問に結論はでなかったが、教師一人一人がよく考えることができた。子どもがこの寓話によって、多様な意見を発言したことは子どもに考えを生む教材であったと考えられる。

「子どもの哲学」が子どものどんな力を育むかについて、外国の先進校の実践を学び、研修を深めていく必要性を感じた。